アイヌの物語世界

なかがわ ひろし
中川 裕 著

平凡社ライブラリー［定価：本体932円＋税］

推薦 谷川道雄（たにがわ・みちお）

河合文化教育研究所主任研究員。京都大学名誉教授。中国中世史の研究者。特に専門は魏晋南北朝史。

著書：『隋唐世界帝国の形成』（講談社学術文庫）、『中国中世社会と共同体』（国書刊行会）、『中世中国の探求――歴史と人間』（日本エディタースクール出版部）、『戦後日本から現代中国へ』（河合文化教育研究所）など多数。（2013年6月7日逝去）

私たち人間は、山や川や動物や植物などのいわゆる自然に囲まれている。自然は人間にとって生活環境であり生存条件である。しかし人間の文明生活はかえって、自己の生活環境を破壊し、人類の生存を危うくするところまで来てしまった。その反省から、自然との共生といった言葉がしきりに使われるようになっている。

しかし、共生という以上は、相手に主体がなければならない。鳥や昆虫や草木それぞれの主体を私たちは実感することができるだろうか。実感できるようにみえても、せいぜい鑑賞したり、ペットとして愛玩するにすぎないのではなかろうか。自然は近代の人間にとって単なる客体でしかないのではないか。「ひと」と「もの」という場合、自然は結局「もの」の範疇を出ることができなかったのではなかろうか。とすれば、「ひと」は「もの」とどうやって共生関係を作ることができるだろうか。

ところが、これと全く異なる自然観をもつ人びとがある。日本列島北辺に住んできたアイヌの人たちである。かれらは、人間（アイヌとは人間の意）の世界の他に、もう一つの世界があると考えている。人間を除く自然界のすべてのものは、みな「カムイ」とよばれる。「カムイ」とは「人間にない力」をもったものという意味で、たとえば何キロも川をさかのぼる鮭（さけ）は、人間にない泳ぐ力をもっているし、熊は人間のもたぬ毛皮を作り出す。それらの個体の一つ一つが「カムイ」（総称すれば鮭カムイ、熊カムイ）なのである。人間はそれらの一部を肉として食べ、毛皮を衣料とするが、それは「カムイ」側からの人間への贈物である。抽象的な自然の恵みなどではない。人間の方でも、かれらの喜ぶ酒や御幣（木を削って作る）を捧げてかれらに感謝する。

つまり「人間の世界」（アイヌモシリ）と並存してもう一つの世界「カムイの世界」（カムイモシリ）があって、この両世界は対等の関係にあり、かつ互いにパートナーの役を果たしているというのである。これこそまさに「自然との共生」の世界である。

詳しいことは、この『アイヌの物語世界』を読んでほしい。著者の中川裕氏は東大出身の言語学者で現在千葉大学に勤務するが、アイヌ語の現地調査を続けているうちに、アイヌの世界の魅力にとりつかれ、アイヌの語り部たちとの厚い信頼関係のもとで、彼女らの口誦する神謡、説話、英雄叙事詩などを採集してきた。いま亡びつつあるアイヌ語とアイヌ文化、そしてそれを伝える人びとが、年老いて少なくなりつつある現状を考えると、貴重な仕事である。

私はあるとき著者に向って、「あなたはカムイの世界を信じますか」とぶしつけな質問をしてみたところ、「アイヌの語り部たちの場に入ると、自分もそういう気持ちになる」との答えだった。アイヌの人びとから見れば、和人（アイヌ以外の日本列島人）の自然観は単調で索漠としたものに映るにちがいない。しかし和人にもかつては「カムイの世界」があり、歴史の中で消えてしまったのではなかろうか。

（2011年版収録）